

14) サンザシ=山欖子/山査子

サンザシはバラ科の落葉低木で高さは2mほど、枝はよく分枝して鋭い刺がある。5月に径1.5cmぐらいの白い花を咲かせて、9~10月頃には扁球形のナシの実にも似た赤または黄色の径2cmほどの果実をつける。原産地は中国中部で紀元前2世紀の文献である『爾雅』(ジガ)という書物には『杕』(キュウ)という名前で記されている。この仲間は中国には16種あって、北部に分布するオオサンザシは果実が3cmにもなり、生食するほかに竹の串に挿して氷砂糖をまぶして『冰糖壺』(ヒョウトウコ)という菓子にする。その他ジュースやゼリーにも加工され、大事な食品になっている。我が国に渡来したのは江戸時代の享保年間のことで、庭木や盆栽にするが、この木の価値は何といっても果実で、中国名は『山欖子』もしくは『山査子』である。果実にはクエルセチン、クロロゲン酸、オレアノール酸などの他、消化酵素を含み、消化の促進や整腸健胃、二日酔いや強心、食中毒の時などにも用いる。日本に輸入されたのもこうした価値が認められていたからだろう。また赤い果実は川魚の骨を柔らかくするといわれ、甘露煮などに数粒入れることも多い。しかしヨーロッパでは恋の花として文学や詩などにしばしば登場し、この木の下で愛を語り合ったことが記されている。特に枝には小さい刺があることから、不倫と結びつけられることも多く、花言葉も「密会」とか「希望」になっている。学名は『*Crataegus euneata*』で、属名はこの木が堅いために「力」を意味するギリシャ語から、種小辞は「楔形の」という意味である。

ローマ時代サンザシは市民の健康を守る女神カルナ『Carna』の聖木とされていた。一方キリスト教の伝説ではイエス・キリストの荆冠(ケイカン)はこの枝で作ったとされ、その時に流れた血がサンザシを清めたともいわれている。このため中世には厄除けの木となり、イギリスでは傷や腫物などに効くと考えられ、また生まれたばかりの赤ちゃんの血を吸いつくす魔の鳥を、この木が追い払ってくれると信じられ、揺り籠にサンザシの小枝を乗せておく呪(マジナイ)も行なわれていた。

イギリスのグラストンベリーという地方に伝わる物語では、ヨゼフという男が聖杯をこの地に運び込んだ際、サンザシの杖を大地に挿して休んでいたところ、杖からたちまち根が生えて、花が咲いたと伝えられている。イギリスではこの花を『メイフラワー』(May flower)と呼んでいたが、かのメイフラワー号にはこんな背景があったのである。

さてそのメイフラワー号は、重量180t、長さ27m、3本マストの帆船で『Pilgrim Fathers』(ピルグリム・ファーザーズ=巡礼始祖)を新大陸へ運んだ船として有名である。もともと彼らはピューリタンの一派だったが、当時の清教徒は大きく分けると二派があり、一つはイギリス国教会の腐敗や墮落に対抗して、内部から改革を進めて行こうとする『長老派』。もう一つは腐敗した教会から分離して、本来の神の教えにしたがって新しい教会を新大陸に作ろうという『分離派』であった。しかし分離派に対する弾圧は厳しく、分離派の指導者は1608年には迫害を逃れるために新興国

オランダに亡命していた。当時のオランダは国力の最も旺盛な時期で、ルター派の信者も多く、亡命地としての条件を備えていたのである。

1620 年になると分離派指導者の一人ブラッドフォードは、新大陸に渡って自分たちの理想を果たそうと移住の決意を固める。そしてオランダを出港するとイギリスのサウザンプトンに寄港して、同志を乗船させると一路アメリカを目指したのである。『メイフラワー号』は 1620 年 9 月 16 日、35 人のピューリタンを含む計 102 人を乗せて、プリマスの港を後にする。彼らは新しい理想に燃えながら 2 カ月の過酷な航海に耐え、11 月に北アメリカのプロビンスタウンに入港した。しかし上陸はせずに、船の修理と物資の補給にあたり、1620 年 12 月 21 日マサチューセッツ州の沿岸付近に辿り着いたのである。上陸に先立ち彼らは船上で『メイフラワー契約』を取り交わし、今後の新大陸での宗教上の契約と政治上の契約を行なった。これはアメリカの建国精神とその後のアメリカの政治、思想、文化などにも大きな影響を与え、アメリカの原点と考えられるものである。彼らは出港地のプリマスにあやかって、この地をプリマスと名付けた。アメリカの地名には本国イギリスと同じものが数多い。時代が下って来るとオランダやフランス、ドイツなどからの移民も行なわれ、彼らも今のニュー・ヨークをニュー・アムステルダムと名付けたり、ニュー・イングランド、ニューフランス、ニュー・スウェーデンなどの地名をあちこちに誕生させた。ニュー・アムステルダムがニュー・ヨークと改称されたのは、イギリスとオランダが前後 3 回の『英蘭戦争』を繰り広げた結果、2 回目の戦後処理でオランダが英国に、ニュー・アムステルダムを割譲したからである。英蘭戦争は最後まで勝敗は着かなかったものの、以来オランダは衰退へと向かい、やがて英国が世界の海を支配する。当時の両国は極めて仲が悪く、英語では『Dutch』のつくものにろくなものはない。『Dutch butter』といえば「人造バター」のことで、『Dutch comfort』といえば「有り難くもない慰め」のことである。『Dutch courage』は酒を飲んでつけた「カラ元気」のこと、『Dutch treat』は「割り勘」のこと、そして『Dutch wife』ということになるのである。話がそれてしまったが、これらのヨーロッパ地名は当初、故郷を捨ててこの地に渡ってきたことを、決して忘れまいとする決意の現われであった。しかしヨーロッパで英国の力が強まるにつれて、アメリカ全体にも英国色が広がり、英国地名も多くなっていったのである。

さてピルグリム・ファーザーズが上陸した時、アメリカ東海岸は冬まただ中で、度重なる寒波が彼らを襲い、この冬を越すことができた者は半分に満たないほど過酷なものだった。にもかかわらずヨーロッパから新大陸に渡ろうとする者は後をたたず、アメリカへの植民は確実に進んだ。これは当時すでにルネッサンスを経験し、科学技術が急速に進歩する一方で、キリスト教の全盛に綻びが生じ、王権もぐらついていたから、人々はアメリカという大地に新しい秩序と心の拠所を無意識のうちに見出していたのだろう。自由の国アメリカはやがて来る民主主義の時代を暗示するもので、

それは旧大陸の全ての柵(シガラミ)を超える聖地と、彼らの目には映ったのである。

こうして厳しい航海を乗り越えて世界中からアメリカにやってきた人々の中から、次代の指導者となる人が生まれてくる。しかしこれは“W.A.S.P.”と決まっていた。Wは『White』白人のことで、Aは『Anglo』Sは『Saxon』で民族の出自を、またPは『Protestant』で宗教を表わし、これ以外の者はアメリカの指導者になることはできなかった。アメリカの歴代大統領の中でこの条件に叶っていなかったのは、唯一ジョン F.ケネディーのみであった。彼の家系はアイルランド移民で、プロテスタントではなくカソリックだった。にもかかわらず彼が圧倒的な支持を得て大統領になったのは、大金持ちの出自や人間的魅力もさることながら、建国以来のアメリカの歴史が次第に風化する一方、アメリカの国力が世界のどの国よりも勝り、繁栄を享受する中、カソリック教徒に対する差別心よりも、平和を謳歌する心のゆとりが生まれていたからであろうか。この時代は歴史的には『Pax Americana』(パックス・アメリカーナ)といわれたようにパックス・ローマや、イギリス統治下の平和な時代、パックス・ブリタニカに匹敵するアメリカの黄金時代で、朝鮮動乱とヴェトナム戦争の狭間の平和な時代であった。因みに『Pax』は平和の女神のことで、それぞれの時代に世界中で砲声が止んだのである。しかし現在のアメリカ大統領が黒人出身のバラク・オバマに変わったことを考えるとき、アメリカは新しい方向へ舵を切り始めたと言っても過言ではあるまい。しかもリーマンショックの後、アメリカの疲弊した企業に対して出資をしたのは、日本の企業であり、ドイツの企業であり、イタリアの企業であり、中国政府だった。中国を除けば日、独、伊 3 国に共通する点は、第二次世界大戦の敗戦国である。世界大戦での敗戦という打撃は、他方では保守勢力を崩壊させるとともに、新しい階級と新しい価値観を醸成していった。新しい国家秩序を作り上げ、ある種の新陳代謝を可能にしたと見ることができよう。平和な時代が長く続くと、必ず収入や、ある種の身分の格差が生じる。過去何百年も敗戦を経験していないイギリスは、『establishment』と称する階級が出来上がってしまっている。もはや大工の子は大工に、肉屋の子は肉屋にということが当たり前になっており、これが勤労意欲や、出世意欲、果ては学習意欲の低下にもつながっている。日本でも戦後 70 年以上に及ぶ平和な時代は、これに近い世襲制を生み出そうとしている。最近話題に上る国会議員の世襲はその最たるものであろう。しかしこれは世襲を禁止する方向へ動くことよりも、新人が当選しやすい制度そのものを作ってゆくことが大切であろう。

今回のアメリカ経済の崩落は、コンピュータを過信しすぎたアメリカの金融と消費最優先のアメリカ経済の全面敗北を意味しているようにも思える。だとすると、ドルの時代が終わりつつあるとの見方があるのも当然であろう。しかし敗戦処理いかんによっては、アメリカの産業構造や消費構造そのものの秩序が入れ替わり、新たなアメリカがこの廢墟の中から生まれてくるのかもしれないとも思えてくる。ちょうど

我々日本人が戦後社会の中で生まれ変わったように…。ドルの価値低下に伴って復活したアメリカの製造業や、国民の貯蓄意識の増大は、まだ確かなものになったとはいえない状態ではあるものの、少なくとも今までのアメリカでは考えられなかった出来事になりつつある。常に世界は動いており、歴史もまた日々更新されている。リーマンショックがアメリカにとって、いいショック療法だったと後世の歴史家が語るときが来ないとは、誰も断言できないのである。そしてアジアの国々の目覚しい発展を見るとき、今後の世界はアジアとアメリカとヨーロッパの3つの経済圏が互いに影響しあいながら、次の時代をリードしてゆくことになるのだろう。この中にあって中国が旧ソ連邦と同様に分裂してゆくこともまた確かであろう。すでに西方ウィグル人との問題や、チベット問題、台湾問題と、その兆しは日に日に明らかになってきている。だからこそ異民族問題に関して、中国政府はいつもナーヴァスになっていると見るのが妥当なのだろう。今や世界の国家は一民族一国家を指向しているようにも見える。その道のりは遙か遠く厳しいものであろうとも、過去の5000年の歴史から見限り、言語や宗教や風俗や習慣の違いが、とかく争いの元になってきたことを考えるとき、多かれ少なかれ進むべき方向性は見えてくる。今世紀中は無理であったにしても、世界の隅々で砲声のやむ時代になってほしいものである。

さて当時の航海は昔ながらの帆船であったから、目的地までまっすぐに進むことはできない。タッキングと称してセールの角度を調整しながら、風を孕むようにジグザグに進む。また船は全てが男社会のもので、もともと女性に都合よくできてない。例えばトイレにしても風呂場にしても、水洗などというものはありえない。今でもヨットなどの小型船のトイレはビルジポンプ式で、あたかも井戸水を汲むように海水を汲み上げ、水洗的にしているに過ぎない。トイレは『Head』（ヘッド）つまり船首のことで、原則的に「立ちション」である。ヘッドに行くと言えばトイレに決まっている。帆船は風を受けて走るから船尾で立ちションをすると、風に「雫」があおられて顔にかかってしまう。だからヘッドなのである。したがってアメリカに女性が渡るには、恥も外聞も捨てなければ不可能に近かった。アメリカに多くの女性が渡って来たのは、帆船が蒸気船になってからのことである。レディー・ファーストのアメリカ精神は、極端に女性が少なかった時代の名残りで、他のヨーロッパ諸国では見ることのできない建国以来の特殊事情ということができよう。

話をサンザシに戻すとしよう。西洋サンザシの中には八重の赤い花を咲かせるものがあり、家庭の庭でもよく栽培されている。しかし苗木を手に入れるとなると多少の努力が必要となる。埼玉県深谷市あたりではよく目にするので、訪ねてみるのもよいだろう。繁殖は挿し木も可能であるが、通常は接ぎ木する。一枝もらってきて挿してみるのも良いだろう。植え場所の土質は選ばないものの、水捌けと陽当たりがよい場所を好む。肥料は油粕のよく発酵したものを置き肥として与えるとよい。



観賞用として栽培される紅花サンザシの花、五月晴れの空に映える花である。イギリスではメイフラワーといわれるゆえんも、ここにあるのだろう(千葉県東金市)。



ヨーロッパには2階建ての家よりも大きな紅花サンザシがよくあるとか(埼玉県深谷市)。



サンザシの花にやってきたアオスジアゲハ。サンザシの花には蜜が多いと見えてこの蝶に限らず、入れ替わりたち替わり、蝶やミツバチがやってくる(東京都小平市薬用植物園)。



紅花サンザシの花、農家の庭先に植えられたかなり大きな木である(千葉県東金市)。



大実サンザシの花。中国には直径が3 cmにもなる大実サンザシがあって、これを生食したり、氷砂糖をまぶして『冰糖壺』(ヒョウトウコ)という菓子にするという(東京都小平市薬用植物園)。



サンザシの赤い果実、ちょっと食指が動く色合いである(東京都小平市薬用植物園)。



サンザシの果実。サンザシはローマ時代から聖木とされてきたが、消化酵素を含み、消化の促進や整腸健胃、二日酔いや強心、食中毒の時などにも用いられた(東京都小平市薬用植物園)。



オレンジ色や黄色の果実もある(東京都小平市薬用植物園)。

[目次に戻る](#)